

## ケニアの「小さい学校」の意味 マサイランドにおける不完全学校の就学実態

内海 成治

(大阪大学大学院人間科学研究科)

澤村 信英

(広島大学教育開発国際協力研究センター)

高橋 真央

(お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター)

浅野 円香

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程)

### 1. はじめに

大阪大学と広島大学は共同でケニア共和国ナロック県における小学校の調査を2000年から継続している。個別児童生徒の情報を継続的に累積する方法(Individual Student Tracing Method: IST法)を中心とした調査を行っており、その一部はすでいくつかの機会に発表している(内海ほか2000、澤村ほか2003)。こうした報告では、見かけの進級構造とは異なる厳密な進級構造を明らかにし、中途退学が比較的少なく転校や落第(留年)が多いこと、小学校の高学年の児童に進学を強く望む集団と周辺的なグループがあることなどを検討してきた。また、IST法により中途退学した女子児童の追跡インタビューや、児童の家庭(ボマ:マサイの伝統的小集落)の調査を行い、マサイの伝統的な社会における近代学校システムの意味を考察してきた(内海2003)。

私たちの調査フィールドであるナロック県内にある小学校数は298校(2003年教育科学技術省データ)で、これまで中心的に調査してきた2つの学校は8学年までであるいわゆる完全小学校で、ケニアではFull Primary SchoolあるいはKCPE School(KCPEは8年修了時に受験する国家統一試験)と呼ばれている。298校のうち260校が

こうした完全学校である。残りの38校は8学年にいたらない不完全小学校であり、これはFeeder SchoolあるいはNon Full Primary Schoolと呼ばれている。この不完全学校には2種類あり、設立間もないため1学年から毎年学年を積み上げてやがて8学年の完全学校になる過程にある学校、および3学年あるいは4学年までで継続的に運営されている学校である。この後者の学校を本論では「小さい学校」と呼び、段階的に発展している学校と区別した。

私たちは伝統社会に適応した学校のあり方の一つとして「小さな学校」独自の存在理由があるのではないかと考え、2005年7月に第1次調査を行った。この調査では、学校の概要と近くの完全学校との位置関係、児童が通ってくる家庭(ボマ)の位置関係と親の意識などから、「小さい学校」の意味を検討した。調査者は内海、澤村、高橋、浅野のほか岩手大学大学院生1名である。そして、2006年2月21日から3月5日にかけてこの小さな学校の第2次調査を行い、前年の児童の進級・進学状況を調査した。調査者は内海、浅野のほか大阪大学学生2名である。調査内容はIST法にもとづく連続調査であり、ナースリーから3年生までの出席者(2006年2月24日)全員のインタビュー、校長および教師へのインタビュー、児童の家庭でのインタ

ビューである。特に児童の異動に関しては慎重にインタビューを行った。

本論文ではこの2回の調査から明らかになった2005年から2006年にかけての児童の進級状況を中心にその要因や背景を考察する。

## 2. 遊牧民の教育に関するユネスコ・IIEP報告書

本論に入る前に近年のこうした遊牧民に対する教育研究の動向を代表するものとして、2001/2002年に行なわれたユネスコ・国際教育計画研究所(IIEP)の『東アフリカにおける遊牧民の教育』研究を検討しておきたい。この研究の成果は、2種類の小冊子(Carr-Hill & Peart 2005; Carr-Hill et al. 2005)となつて2005年に発刊された。

この研究の背景はCarr-Hill (2005, p.15)によれば次のようなものである。東アフリカ6カ国の最近の報告によれば、遊牧民は全人口の10パーセントを占めている(ウガンダは5パーセント)。これらの国では、つい最近まで遊牧や牧畜という生活形態は普通のことであった。遊牧コミュニティとは、「純粋な」牧畜民('pure' pastoralists)、農耕牧畜民(agro-pastoralists)、移動牧畜民(transhumant pastoralists)、狩猟採集民(hunter-gatherers)の混在したものとして考えられてきた。しかし、近年、遊牧コミュニティは大きな変化にさらされている。各国で遊牧民の定住化政策が推進され、土地の私有化、定住農耕民や牧畜民同士の衝突などである。

遊牧民の公教育への参加は低い。その理由としては、学校ネットワークの脆弱性、つまり常に移動しているために公教育へのアクセスが困難なこと、公教育が提供するカリキュラムが不適切なためだと考えられてきた。こうした背景のもとに現在においても次の2つの対立した考え方がある。一つは、牧畜

民の親は子どもに教育を受けさせたいと考えているにもかかわらず、学校が遠いことなど教育の供給の不適切さが問題だという立場である。別の考え方は、現在行なわれている公教育は、遊牧の文化および遊牧民の子どものニーズや生活上必要なものと異なっているというもの、すなわち教育内容が不適切だというものである。

このカーヒルらの立場はこの両者を統合したもので、遊牧民は公教育システムの抵抗勢力ではなく、教育政策の不適切さ、あるいは彼らのニーズとのミスマッチに問題があると言う立場をとっている。そしてこれまでの遊牧民に対する教育支援は小規模での活動では成功例が見られるが、全体的には失敗していると結論づけている。彼らは処方箋として、<教育的に遅れている>遊牧民の子どもを国の公教育システムに統合するに際しての三つの課題を提示している。

- (a) 遊牧の子どもを彼らの生業へ統合すること。
- (b) 子どもの中途退学や未就学の原因の解明。
- (c) 社会的、経済的、政治的レベルでの遊牧民周辺化の原因の解明。

生業への統合とは、学校と仕事をどのようにマッチングさせるかと言うことである。遊牧民にとって男子も女子も重要な働き手である。男の子は、ヤギや羊の番、女の子は家事、子守、水汲みなどである。こうした仕事と通学をどのように整合性を持たせるかである。これには、一方的に遊牧民の側が合わせることや学校が遊牧民の生活に合わせるのではなく、両者のコーディネーションが必要である。さもないと、子どもを階層化したり学校教育の質的低下をもたらすことになるからである。それゆえに、それぞれのコミュニティの実際に即した、現実的な解決策を探る必要がある。子どもの中途退学や未就学の原因究明に関しては、実際のフィールドに即してその原因を解明することが必要とされ

る。また、遊牧民の周辺化に関しては、それぞれの政府の遊牧民対策に教育政策が含まれることを要請している。いずれにしても、土地政策、貧困対策とともに教育政策が検討され、さらに実際のフィールドワークに基づく、コミュニティとの対話の必要性を示していると言えるであろう。

### 3. 調査の仮説

本調査を実施するにあたって「小さな学校」の意味に関して私たちが検討したのは次の二つの仮説である。

(仮説1) 小さい学校は遊牧民の教育を促進する一つの方法である。たとえ3,4年であっても教育を受けることは遊牧民の子どもにとって意味がある。識字、計算、合理的な概念を学ぶことは遊牧の生活様式にとって役に立つはずである。この仮説が支持されるのは、「小さい学校」を修了した児童が、進学することなく遊牧の世界に戻る場合である。

(仮説2) 小さい学校は、遊牧を生業とするマサイの家(ボマ)が学校から離れているために、通学が困難な低学年の子どもを短期間学ばせる学校である。つまり拡大されたナーサリースクールとして機能している。この仮説の採択には、小さい学校を修了した児童が近隣の完全学校に転校して教育を継続していることが必要である。

### 4. 調査概要

#### (1) 調査地点

調査学校は、リフトバレー地方(Rift Valley Province) ナロク県(Narok District) マオ郡(Mao Division) ススワ地区(Suswa Zone)のイルキークアーレ小学校(Ilkeek Aare Primary School)である。リフトバレー地方にはケニア中部の大地溝帯内の22県が属しており、そのうちカジヤド県とナロク県はマサイランドと呼ばれ

るマサイの居住地域である。マオ郡はナロク県の中でもナイロビに近い東部地域であり北部のマオ山塊と南部のススワ爆裂火口という、二つの山に挟まれたススワ平原を中心とした郡である。そのうちススワ火山の北側山麓のススワ平原がススワ地区である。またススワ地区はススワ爆裂火口の外輪山も含む地域であり、外輪山の上にも小学校がある。ススワ平原はマサイの共有地であり、マサイのクラン(氏族)としてはイルモレリアン(Ilmoelian)とイマケセン(Imakesen)が中心である。現在、遊牧民の定住化政策が進んでおり、マサイの土地の私有化が図られている。家族によって異なるが100エーカー、50エーカーあるいは30エーカーを囲い込み、私有地として牧畜や畑作が行われている。そのため、囲い込んだ土地には有刺鉄線が張られている。

マオ郡には現在15の小学校があるが、そのうち完全学校は9校で、不完全学校は6校である。不完全学校のうち3校は、3年から5年生までの学校である。残りの3校は毎年学年を増やして、やがては8年生の学校になる過程の学校である。完全学校のなかでもイルキークアーレ小学校の北にあるルクニ小学校のように2004年に完全学校になった新しい小学校もある。最も児童が多く、また成績の優秀なのはオラシティ小学校である。

#### (2) 調査方法

校長および教師へのインタビューを行うと共に、IST法による児童シート(2005年および2006年)およびGPS(全地球測位システム)による学校および家庭(ボマ)の関係図を作成した。今回GPSを利用してイルキークアーレ小学校と近くの完全小学校および各ボマの位置を測定した。これは、それぞれの仮説を検定するためにボマを訪問し親の意向や児童の進路を確かめるために必要だからである。

表1 イルキークアーレ小学校の児童数・教師数の推移(1999-2006年)

暦年	児童数					教師数
	1年	2年	3年	4年	合計	
1999	13(-)	---	---	---	13(-)	1(0)
2000	12(-)	10(-)	---	---	22(-)	1(0)
2001	7(1)	10(2)	9(6)	---	26(9)	1(0)
2002	9(3)	10(4)	9(3)	9(6)	37(16)	2(1)
2003	21(6)	15(5)	12(4)	---	48(15)	2(1)
2004	9(4)	10(7)	12(4)	---	31(16)	2(1)
2005	11(3)	13(5)	15(2)	---	39(10)	3(2)
2006	11(6)	10(6)	13(5)	---	34(17)	3(2)

(注)カッコ内は女性数を示す。2002年は4学年が一時的に存在したが、その後は3学年までである。

(出所)1999年と2000年のデータは現在の校長のインタビューによるもので男女は不明である。2001年から2005年は学校に保存されていた教師委員会への報告( Teacher Service Commission Form )による。報告は学期ごとに行われているが、その年の最初のデータ(2月)を採用した。2006年は校長へのインタビューによる(登録最終日は2月末日であるため2月28日に在籍している児童数)。

## 5. 調査結果

### (1) 学校の概要

イルキークアーレとはマー語(マサイ語)で2本(アーレ)の木(イルキーク)という意味であり、学校の横に2本のアカシアの大木がある。あたりは草原であり、シマウマやトムソングゼル(トマソングゼル)の群れが生息し、キリンやダチョウも見ることが出来る。

この学校は1980年代に設立されたが、1990年代に廃校になっていた。校長の説明によるとこの学校の建てられている土地は共有地(Group Land)であるが、1990年代に関係者間の土地の利用に関する合意が崩れたためという。

学校は1999年に再開され、現在の校長であるダニエル・ナイラバ・サンカレ氏(Daniel Nairaba Sankale)が赴任した。学校の校舎は現在南北に長い1棟の建物で5教室と教員・校長室に分けられている。そのうち2教室は2004年にアメリカのセブンスデ

イ・アドベンチストの工作隊(ボランティアグループ)がやってきて建設していったとのことである。その他、雨水タンク、教師宿舎、物置兼キッチン、教員トイレ、児童トイレ2つが周辺に建てられている。しかし、学校周辺にフェンスはなく、危険なために校長も教師も教員宿舎に住んでいない。1999年からの学校の教師数と児童数の変化は、表1のとおりである。

### (2) 学校とボマの位置関係

学校を中心として18のボマから子どもが通っている。その位置関係および距離・標高差を、GPSによって実測したものが、それぞれ図1および表2である。イルキークアーレから各ボマまでの距離は最も遠いボマで2.8キロメートル、最短で0.4キロメートル、平均は1.6キロメートルである。これらのボマは平原であるために標高差は15メートルから-21メートルの範囲で平均は-1メートルである。学校から多くのボマは見るこ



図1 小学校とボマの位置関係図

(注) 移動ボマというのは、遊牧のために家を閉めて誰も住んでいない状態のボマのことである。

表2 ボマと近隣小学校との距離および標高差

ボマ	標高 (m)	イルキークアーレ校		オラシティ校		エンパシュ校		ルクニ校	
		距離 (m)	標高差 (m)	距離 (m)	標高差 (m)	距離 (m)	標高差 (m)	距離 (m)	標高差 (m)
10	1641	2,300	4	6,500	113	4,200	-14	2,900	40
11	1642	2,100	3	6,700	112	3,800	-15	3,500	39
12A	1640	1,900	5	6,200	114	4,300	-13	3,000	41
12B	1646	2,000	-1	6,000	108	4,500	-19	2,700	35
13	1651	900	-6	5,600	103	4,700	-24	3,300	30
14	1648	400	-3	5,500	106	4,900	-21	3,700	33
15	1630	2,200	15	7,100	124	3,200	-3	4,200	51
16	1632	2,400	13	7,200	122	3,200	-5	4,000	49
17	1630	2,800	15	7,500	124	3,100	-3	3,900	51
18	1633	1,400	12	6,400	121	3,900	-6	4,000	48
19	1650	1,200	-5	4,500	104	5,800	-23	2,800	31
20	1652	1,400	-7	4,700	102	5,700	-25	2,500	29
21	1649	500	-4	4,800	105	5,500	-22	3,500	32
22	1666	1,900	-21	5,300	88	6,200	-39	5,500	15

(注) ボマの記号は図1と対応している。

表3 ススワ地区関連4小学校の児童数および教師数

(2006年6月現在)

小学校名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	合計	教師数
イルキークアーレ	22 (12)	16 (9)	18 (6)	-	-	-	-	-	56 (27)	3 (2)
オラシティ	125 (73)	126 (73)	120 (56)	126 (64)	123 (53)	86 (40)	101 (42)	78 (28)	885 (429)	17 (7)
エンパシュ	70 (35)	51 (22)	54 (24)	40 (18)	27 (11)	24 (11)	17 (9)	9 (5)	292 (135)	8 (5)
ルクニ	30 (15)	26 (11)	39 (19)	26 (13)	21 (7)	9 (5)	19 (6)	4 (2)	181 (78)	7 (0)

(注) カッコ内は女子の内数。出所資料上の合計児童数が学年別数値から再計算した合計と異なる場合(オラシティ) 再計算した数値を優先した。

(出所) ススワ地区教員センター資料

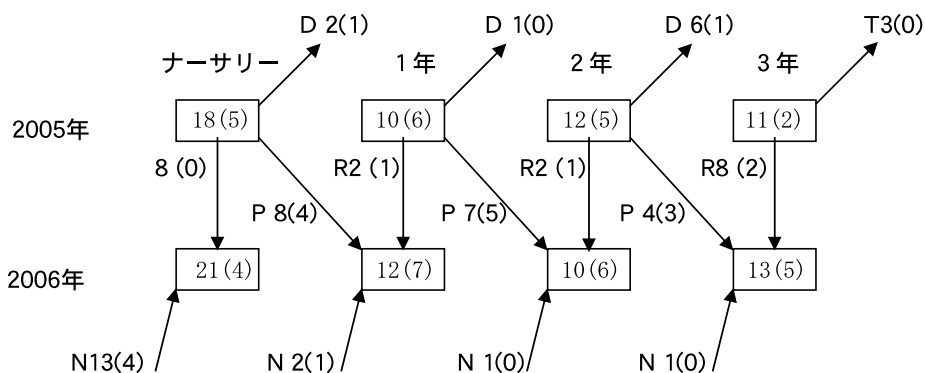


図2 イルキークアーレ小学校 児童フローダイアグラム (2005 - 2006年)

(注) D= Disappeared (長期欠席者)、R= Repeated (留年者) P= Promoted (進級者)、N= Newcomer (転校生)。表1の学年別児童数と異なるのは、本図の数値は実際に個人が特定できた子どものみをカウントしているため。

ができる。ボマを訪問しても学校にある2本の木はほとんどのところから認識でき、こうした木が平原での重要な目印であることが分かる。ボマの多くは学校(イルキークアーレ)とエンパシュ小学校およびルクニ小学校の三角形の中に位置している。その理由として、オラシティが丘陵地帯にあり標高も1754メートルであり、イルキークアーレの1645

メートルと比べて100メートル以上も高い。ボマ23から西は丘陵でボマを作るのに不適切だからである。また、2つ目としてはオラシティ校が寄宿舎を備えた大規模校であり、かつ優秀校であるため、オラシティ周辺の子どもははじめからオラシティに行くからであろう。これら3校の学年別児童数および教師数を比較すると表3のとおりである。

### (3) 児童フローダイアグラム

2005年と2006年における児童の動きをIST法によって跡づけ、図2に示した児童フローダイアグラム(進級ダイアグラム)を作成した。ケニアの学年は1月に始まるために、2005年7月の調査と2006年2月の調査により児童の進級状況を確認している。児童数だけ見ていると確かに進級しているように見える。しかし、一人ひとりの児童を追跡すると、大きく異なった姿が見えてくる。たとえば、2005年の2年生12人(女子5名)はどうなったか。進級したのは4名(女子3名)である。2名(同1名)は留年、6名(同1名)は長期欠席である。校長は行方不明(disappear)という言葉を使っていた。半数がいなくなっているのである。ところが2006年の3年生には13名(女子5名)が在籍している。そのため見かけは12名全員が進級し、転校生が1名加わったように見えるのである。しかし3年生のうち8人は留年生なのである。

### (4) 3年生はどうなったか

では、2005年に在学していた3年生は2006年2月にどうなっていたか。2005年の教師委員会(Teachers Service Commission)への登録の報告では、3年生は15人で男子13人、女子2人である。しかし、7月の調査時点で把握できたのは11人で男子9人、女子2人である。この11人は、進学3人(女子ゼロ)、留年8人(女子2人)である。転校したとされた児童は、11名のうち3名で3割に満たない。次に児童一人ひとりの動きを追ってみよう。

#### 進学した児童

3人の男子が完全学校に進学したとのことである。彼らの学校選択や進学の理由、さらには現在の状況を家庭訪問して調べてみた。

#### ・メイリア(仮名)の場合

メイリアピア(男子)はルクニ校に進学と

報告されている。彼はボマ11の子どもである。家庭は遊牧を生業としている。両親共に教育経験はない。2005年のインタビューでは4年生への進学を親が許さずに3年生を留年していた児童であり、もし進学させるのであればエンパシュへ行かせると答えていた。それがルクニ校へ進学したという。その理由は何であろうか。

まず、考えられるのは学校への距離である。ボマ11は、イルキークアーレ校へは2.1キロメートル、オラシティには6.7キロメートル、エンパシュ3.8キロメートル、ルクニ3.5キロメートルである。標高差はイルキークアーレ校3メートル、オラシティは112メートル、エンパシュへは-15メートル、ルクニ39メートルである。こうした指標からもルクニ校への通学が有利と考えられる。このボマ11の親は学校への期待として教室の確保と教育の質を良くしてほしいと述べている。この点からも新しい学校であるルクニ校への期待があると考えられる。

しかし2006年3月に私たちが家庭訪問した段階では、彼は学校へ行かずに家で羊の世話をしていた。学校に行かない理由は制服が買えないからだと言う。制服が購入できない理由は干魃で羊が死に換金できないためという。

#### ・ティマ(仮名)の場合

ティマ(男子)はエンパシュ校の4年生に進学したと報告されている。彼は留年せずに3年生になり、さらに完全校に移ったのである。彼はボマ16の子どもであり、家は遊牧を業としている。両親共に教育経験はない。2005年のインタビューではオラシティ校への進学を希望している。しかし、実際にはエンパシュ校へ進学していた。

ボマ16は、イルキークアーレ校へは2.4キロメートル、オラシティには7.2キロメートル、エンパシュ3.2キロメートル、ルクニ4.0キロメートルである。標高差はイルキークアーレ13メートル、オラシティ122メート

ル、エンパシュ - 5メートル、ルクニ49メートルである。いずれの指標からもエンパシュ校への通学は有利である。また、ボマ16からはオラシティとエンパシュにそれぞれ2人の子供が通っている。

ボマ16は、最近この地区へ移動してきたボマであり教育にも力を入れていることが考えられる。そのために成績の良いオラシティ校を目指していた。それがエンパシュ校への進学に変更したことは、地理的要因と2005年の秋からの干ばつによって、経済的な困難さからより近くの学校への変更したことも考えられる。

しかし、2006年3月の家庭訪問の時点では、ティマもメリピアと同じく学校に行かずに羊の世話をしていた。理由は制服が買えないからだと言う。

#### ・シャヨ(仮名)の場合

シャヨ(男子)は校長からはルクニ校への進学しているとのことであった。ボマ12Aは、イルキークアーレからの距離は1.9キロメートル、オラシティ6.2キロメートル、ルクニ3.0キロメートル、エンパシュ4.3キロメートルである。ルクニ校への進学は距離で決めたというのはうなずける。彼の家は母2人、兄弟姉妹は9人である。すでに2人はオラシティ校や中等学校に進学している。残りの6人はイルキークアーレ校で3年生に2人、2年生に2人、ナーサリーに2人がそれぞれ在籍し、兄弟姉妹のうちの1人は3年生で留年している。上の子どもがオラシティ校へ行っているのにシャヨがルクニ校に行っているのは、母が違う可能性、現在の干魃による経済的打撃により少しでも楽な学校を選んだとも考えられる。校長は家庭には問題ないと言うのであるが、訪問した限りではシャヨは家におり、その理由として制服代の1000シリング(約650円)がないために学校に行っていないとのことであった。

このように3名の進学したとされる児童は、いずれも制服の購入ができないとの理由で家

の仕事を手伝っていた。

#### 留年した児童

2006年に3年生に留年したのは8名(女子2名)である。一人ひとりを検討するのは煩雑であるので、うち2名の女子児童と2名の男子児童の例を述べておきたい。

#### ・ナイアノイ(仮名)の場合

ナイアノイ(女子)は13歳である。この学校ではひときわ背の高い児童である。3年の終わりのテストで最下位であり、500点満点の154点であった。彼女の成績が良くない原因の一つは、ナーサリーに行くことなく年齢が高くなってから小学校にきたことと、欠席が多いからである。ナイアノイの母親シロレは離婚し再婚した。再婚した父ティバヤ(仮名)はナイアノイを受け入れず母親の実家に引きとられた。彼女の姓は母方の祖父の名前である。それゆえにナイアノイは祖母の世話を引き受けている。彼女は2005年の調査時から制服は着用していない。

#### ・シラントイ(仮名)の場合

シラントイ(女子)は11歳、彼女の留年の理由は長期欠席である。成績はクラス12人中の5番目であった。彼女の欠席の理由は家族の世話である。母が貧しいために、母の姉妹と暮らしている。甥や姪の世話は彼女の仕事である。2005年の調査時から制服を着用していない。

#### ・モーゼス(仮名)の場合

モーゼス(男子)は旧3年生で最も欠席の多かった児童である。成績は7番目で中位である。スワでは水曜日と土曜日が牛や羊の市と共にマーケットの開催される日で、水曜日は欠席者が多い。モーゼスは水曜日にいつも欠席する。親が学校の意味を感じていないという。ボマ10から通学しており、学校までの距離は2.3キロメートルである。

#### ・メリ(仮名)の場合

メリ(男子)は成績が非常によい児童で、500点のうち362点でクラス2番である。父



親が経済的理由から進学を望まず留年した。今年は昨年の秋からの早ばつで、多数の家畜が死んだために進学に必要な資金が得られないことが原因という。2006年は制服を着用していた。

## 6. 考察

### (1) フローダイアグラムから見えるもの

IST法によるイルキークアーレ小学校のフローダイアグラムからは、澤村ら(2003)のいう学級における3層構造、つまりコアグループと周辺グループ、およびその中間層の3つの存在が指摘できる。つまり進級グループ、行方不明グループ、その中間層としての留年グループである。イルキークアーレ校は、周辺の完全小学校よりも生活条件が厳しいために、周辺グループは少数の中途退学者ではなく大量の行方不明者となっている。中間層の留年グループは最上級学年の3年で発生している。これは進学が転学という形態を取るために大きな障壁になっているからであろう。

また、その進学者も制服を購入できないという経済的要因により学校に行っていないことがはっきりした。現在、ケニアでは初等教育無償化政策により就学率が上がったが、経済的要因で来られない児童がいると報告されており、教育省内でも制服についての論議が行われている。今回の調査結果は制服が理由で学校に行けない子どもがかなり多いことを予感させる。JICA ケニア事務所上級クラークのキベ氏とのインタビューでは、これまで制服が理由で学校に行っていない児童に関して、議論はされてもその実態はほとんど把握されていないとのことである。

### (2) 子どもの学校と生活世界

私たちは近代教育システムが伝統的社会に受容されるのは、遊牧民の生活世界に取り入れることが可能と判断された場合のみである

と考えている。それゆえに取り入れやすい学校システムが考えられるべきであり、そのために、移動学校や寄宿制学校の試みは重要である。私たちが考えたどちらの仮説であっても「小さな学校」はもう一つの選択肢であると思われる。

2005/2006年のケニアは2000年以来の早ばつであり、調査地点は動物の死臭が漂っていた。2005年の調査で見ることのできたシマウマやガゼルの大群は見ることができなかった。かわりに大量の死骸である。羊は非常にやせて、死を待つばかりの感があった。マサイの社会はこうした自然災害に弱い社会、あるいはその影響を受けやすい社会であり、それが子どもの学校教育に大きな影響を与えるのである。

### (3) 「小さい学校」の意味

2005年の第1次調査での校長、教師および親のインタビューでは、3年を修了した児童は3つの学校のどこかに進学するということであり、この学校は拡大ナーサリーとして機能していると思われた。つまり仮説2である。

2006年の第2次調査の結果および児童フローダイアグラムは、拡大ナーサリーとしての学校よりも短期間の通学後マサイの生活に戻るといふ仮説1を支持するように思われる。つまり、大量の落第生の存在をどう考えるかである。2005/2006が早ばつで、大量の羊が死に、牛の放牧地は遠隔地になってしまった。そのことがマサイの家計を圧迫したことも指摘される。進学予定の児童がいずれも制服の購入が困難との理由で家にとどまっていることや、メーリのように兄弟姉妹の多い子どもは成績に関係なく落第させられているのは、こうした経済的な課題があるからである。しかし、家庭の事情によって欠席が多く、成績の悪いナイアノイやシラントイは進学が可能であろうか。その可能性は非常に小さいだろう。彼女たちはイルキークアーレ小

学校のあとボマに戻る可能性が高いのである。

このように留年を繰り返す児童の動向をいま少し追うことで、こうした「小さい学校」の意味が明確になってくると思われる。一つの可能性は、近くの完全小学校との役割分担である。中等学校を目指す学校と短期間の通学で生活に戻る学校としての存在である。貧困を含めたさまざまな家庭の事情により、十分な通学を補償されていない子どもが学ぶ場としての学校である。

マサイランドでは問題を抱えた子どもの生活を保障するソーシャルネットは極めて不十分である。不完全な学校ではあっても学校につながっていることは子どもにとって大きな意味がある。今回の調査からは2つの仮説以外に、子どものソーシャルセキュリティーの最低限の保障を小さな学校が担っているという新たな側面が見えてきたようにも思われる。

## 謝辞

第1次調査で行なったGPSによる学校と家庭の位置測定は、内海祥治氏（岩手大学大学院農学研究科博士課程）によるものである。また、第2次調査には中川真帆および森榮望（大阪大学人間科学部）が同行してインタビュー調査を担当した。本調査の実施には、基盤研究A「アフリカ地域の社会と教育に関する比較研究 フィールドワークによる新たな展開」(研究代表者 澤村信英)および基盤研究B「難民および紛争後の国への国際教育協力の動向と課題」(研究代表者 内海成治)の科学研究費補助金（平成16年度および平成17年度）の一部を使用した。ここに記して感謝したい。

## 参考文献

内海成治（2003）「国際教育協力における調査手法 ケニアでの調査を例にして」澤村信英編

『アフリカの開発と教育 人間の安全保障をめざす国際教育協力』明石書店，59-81頁．

内海成治・高橋真央・澤村信英（2000）「国際教育協力における調査手法に関する一考察 IST法によるケニア調査をめぐって」『国際教育協力論集』3巻2号，79-96頁．

澤村信英・山本伸二・高橋真央・内海成治（2003）「ケニア初等学校生徒の進級構造 留年と中途退学の実態」『国際開発研究』12巻2号，99-112頁．

Carr-Hill, R. & Peart, E. (2005). *The Education of Nomadic People in East Africa—Review of Relevant Literature*. Paris: UNESCO/IIEP.

Carr-Hill, R. with Eshente, A., Sedel, C. & de Souza, A. (2005). *The Education of Nomadic People in East Africa—Synthesis Report*. Paris: UNESCO/IIEP.